

建築家の創作におけるイメージと現実空間の〈隔たりの認識〉—その1

正会員 ○出口 広訓*
同 山田 深**
同 丸山 友士***

隔たりの認識 イメージ 現実空間
現代建築 言説 建築家

1. 序 建築家という職能は、あくまでイメージを図面化するにとどまるものである。建築家にとって建築の創作とは、イメージの実体化を構想することであるとみえる。しかし現実にはイメージ通りになるとは限らない。建築家は創作したものに對し、イメージと現実空間の差異を検証することで、イメージと現実空間の隔たりの認識する。これは繰り返される創作活動においてなされる思考の指針となる意識であるといえ、建築家の強い関心の対象を示すともいえる。また、この内省的な姿勢は、建築の創作という社会的行為に対するモラルにも繋がり得るのではないだろうか。そこで本論文では、建築誌に発表された建築家による言説を資料¹⁾として扱い(表1)、建築家がイメージと現実の間でどのような隔たりの認識しているかが明確に読み取れるものを〈隔たりの認識〉として抽出し(表2)、これに對し分析を行う。現代の建築の創作において、イメージと現実空間の隔たりに對して建築家は意識的であるか、意識的であったとすればどのように認識されているのかという〈隔たりの認識〉を分析・考察することで、現代建築家の創作に對する思考の一端を捉えることを目的とする。まず本編で〈隔たりの認識〉について分類・整理し、後編でその通時的考察を行う。

2. 〈隔たりの認識〉の〔意味内容〕

2.1 〔意味内容〕における3つの側面

建築の創作において建築家がイメージと現実空間の間でどのような〈隔たりの認識〉を持っているのか、その〔意味内容〕を明らかにする。建築家の言説のなかで述べられる〈隔たりの認識〉について、KJ法的²⁾に分類・整理したのが図1である。これにより【関係】、【自己】、【形式・規範】の3つの側面で捉えられた。【関係】とは、例えば周辺環境と建築の調和をイメージしたにも関わらず、現実には周辺環境から建築が浮いてみえてしまうというような、周辺環境や建築材料といった具体的な事物と、建築との関係において、建築家の〈隔たりの認識〉がみられるものである。他の側面と比較すると具体的、現実的な〈隔たりの認識〉の側面といえる。【自己】は、建築家自身の主題や創作における思考など、建築家の概念や意識において〈隔たりの認識〉がみられるものであり、抽象的な〈隔たりの認識〉の側面といえる。【形式・規範】は、既成概念や固定観念、建築が本来的に持っている原則において〈隔たりの認識〉がみられるもので、他の2つの側面とは、また異なった性格を持つ側面である。

2.2 〔意味内容〕の詳細 〔意味内容〕における3つの側面と並行して得られた、具体的なカテゴリーをみていくことで、〈隔たりの認識〉の詳細を明らかにする。

【関係】に含まれる3つのカテゴリーからみていく。まず《建築と人間》は、建築と人間の関係に對して、建築家の〈隔たりの認識〉がみられるものである。行為

表2 抽出例

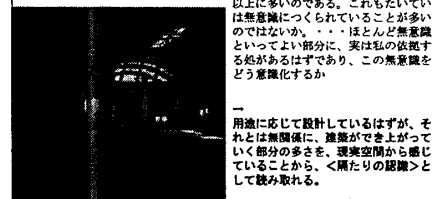

<p>NO.79 歴史空間現象法覚書 —渡辺豊和</p>  <p>いかに用に忠実に設計しても、用とは無関係にでき上がってゆく部分が無意識に多く含まれている。これもたいていは無意識に多く含まれていることが多いのではない。・・・ほとんど無意識というより部分的に、実は私の依拠するところがあるはずであり、この無意識をどう意識化するか</p> <p>用途に応じて設計しているはずが、それとは無関係に、建築がでまがってゆく部分の多さを、現実空間から感じることから、〈隔たりの認識〉として読み取れる。</p>	<p>NO.97 主題を捜す、という主題 —磯崎新</p>  <p>メタレベルにしかない概念を具体的な建築の設計上の主題にすることの無理な加減を、私は経験的に知っていました。</p> <p>概念的イメージを、現実空間として実体化すること、深い地層が見られることから、〈隔たりの認識〉として読み取れる。</p>
---	--

表1 資料リスト

No.	掲載年月	論文名	No.	掲載年月	論文名
1	5006	ローハウス建築	83	9403	消化の強制
2	5304	建築師のゆえ	84	9406	エグザンブル—ハウス3の場合
3	5606	現代建築の動向と日本建築の現状	85	9407	今日の公共建築の諸論
4	6309	現代建築をつくるために	86	9409	建築が生産を創出する
5	6405	建築の歴史と建築の未来	87	9410	近世建築の歴史と建築のイデオロギ
6	6507	住まい—その心の世界	88	9501	現代建築のプリミティブ—ハット
7	6607	建築の歴史と建築の未来	89	9508	建築の歴史—部分に對する余論
8	6705	建築における倫理的な条件	90	9511	建築と地、建築、そして人間
9	6707	住宅論	91	9512	内閣をデザインする
10	6801	住宅設計の新しい作法	92	9605	建築の歴史とその周辺
11	6808	知覚と空間のダイナミクス	93	9607	建築の歴史と建築
12	6905	建築デザイン—建築設計としてのマテリアリティ	94	9704	〈昨日〉あるはく〈明日〉としての建築—インテリジェント
13	7001	空間的認識の形成	95	9705	新たな建築
14	7003	生き残る建築	96	9706	「過去」から「未来」の建築へ
15	7004	建築の空間	97	9801	建築を語る、という主題
16	7101	建築の歴史と建築	98	9805	建築性を意識するために
17	7105	建築と空間の境界に對する新たな認識のための	99	9807	東京大学工学部の仕事を遂げる
18	7107	建築としての建築	100	9808	建築の歴史
19	7108	アーバンデザイン	101	9902	日本のポストモダン
20	7110	建築としての建築	102	9908	建築の歴史
21	7110	くまびつつの建築—による建築	103	9910	建築の歴史
22	7204	〈手紙〉について	104	9911	建築の歴史
23	7207	内閣の建築	105	9912	建築の歴史
24	7211	都市と建築—建築家を	106	9912	建築の歴史
25	7201	設計の方法	107	9206	建築の歴史
26	7203	建築の歴史と建築	108	9211	失われた時を求めて
27	7207	建築—その歴史と建築	109	9211	失われた時を求めて
28	7208	建築と空間の境界に對する新たな認識のための	110	9303	建築の歴史
29	7401	建築の歴史と建築	111	9304	建築の歴史
30	7401	建築の歴史と建築	112	9307	建築の歴史
31	7403	建築—大塚英昭と大塚英昭の建築	113	9308	建築の歴史
32	7407	建築の歴史と建築	114	9311	建築の歴史
33	7501	建築の歴史と建築	115	9401	建築の歴史
34	7502	建築の歴史と建築	116	9408	建築の歴史
35	7504	建築の歴史と建築	117	9501	建築の歴史
36	7508	建築の歴史と建築	118	9505	建築の歴史
37	7510	建築の歴史と建築	119	9508	建築の歴史
38	7510	建築の歴史と建築	120	9507	建築の歴史
39	7601	建築の歴史と建築	121	9607	建築の歴史
40	7603	建築の歴史と建築	122	9607	建築の歴史
41	7603	建築の歴史と建築	123	9701	建築の歴史
42	7603	建築の歴史と建築	124	9701	建築の歴史
43	7607	建築の歴史と建築	125	9704	建築の歴史
44	7607	建築の歴史と建築	126	9704	建築の歴史
45	7610	建築の歴史と建築	127	9705	建築の歴史
46	7611	建築の歴史と建築	128	9711	建築の歴史
47	7611	建築の歴史と建築	129	9808	建築の歴史
48	7612	建築の歴史と建築	130	9911	建築の歴史
49	7701	建築の歴史と建築	131	9907	建築の歴史
50	7702	建築の歴史と建築	132	9908	建築の歴史
51	7703	建築の歴史と建築	133	0009	建築の歴史
52	7705	建築の歴史と建築	134	0101	建築の歴史
53	7708	建築の歴史と建築	135	0102	建築の歴史
54	7709	建築の歴史と建築	136	0102	建築の歴史
55	7802	建築の歴史と建築	137	0103	建築の歴史
56	7806	建築の歴史と建築	138	0104	建築の歴史
57	7807	建築の歴史と建築	139	0106	建築の歴史
58	7808	建築の歴史と建築	140	0108	建築の歴史
59	7810	建築の歴史と建築	141	0108	建築の歴史
60	7811	建築の歴史と建築	142	0110	建築の歴史
61	7812	建築の歴史と建築	143	0110	建築の歴史
62	7812	建築の歴史と建築	144	0112	建築の歴史
63	7803	建築の歴史と建築	145	0201	建築の歴史
64	7807	建築の歴史と建築	146	0209	建築の歴史
65	7808	建築の歴史と建築	147	0211	建築の歴史
66	7810	建築の歴史と建築	148	0302	建築の歴史
67	8006	建築の歴史と建築	149	0310	建築の歴史
68	8006	建築の歴史と建築	150	0311	建築の歴史
69	8008	建築の歴史と建築	151	0403	建築の歴史
70	8011	建築の歴史と建築	152	0403	建築の歴史
71	8102	建築の歴史と建築	153	0409	建築の歴史
72	8104	建築の歴史と建築	154	0409	建築の歴史
73	8107	建築の歴史と建築	155	0409	建築の歴史
74	8201	建築の歴史と建築	156	0409	建築の歴史
75	8201	建築の歴史と建築	157	0410	建築の歴史
76	8204	建築の歴史と建築	158	0412	建築の歴史
77	8206	建築の歴史と建築	159	0501	建築の歴史
78	8208	建築の歴史と建築	160	0505	建築の歴史
79	8209	建築の歴史と建築	161	0505	建築の歴史
80	8301	建築の歴史と建築	162	0509	建築の歴史
81	8307	建築の歴史と建築	163	0510	建築の歴史
82	8311	建築の歴史と建築	164	0510	建築の歴史

Thought of Difference between Image and Real Space by Contemporary Japanese Architects (1)

DEGUCHI Hironori, YAMADA Shin, MARUYAMA Yuji

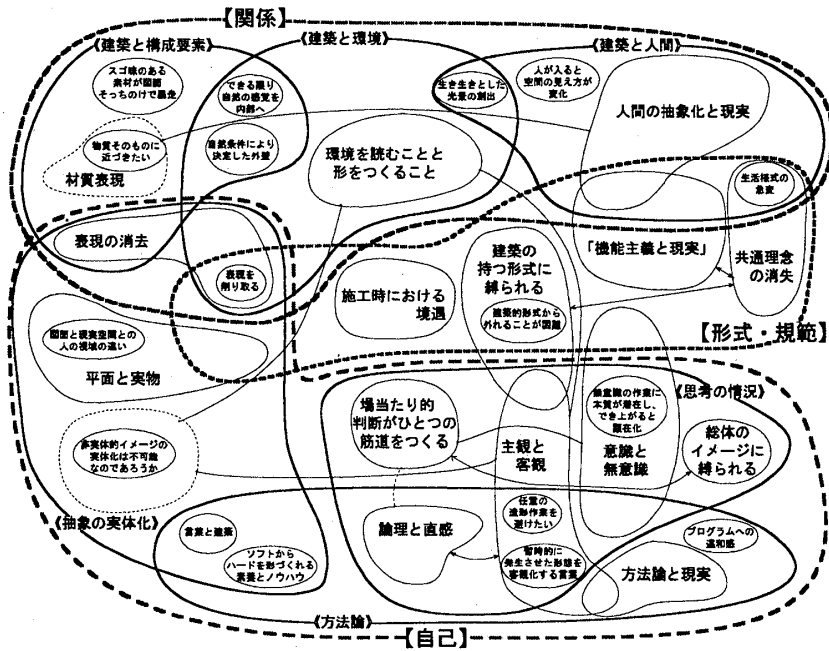


図1 建築家の<隔たりの認識>の関係図

や身体など、人間を抽象化して捉え建築を創作することと現実の間に<隔たりの認識>がみられる「人間の抽象化と現実」が大きなまとまりとしてみられた。《建築と環境》は、敷地や周辺環境、自然や都市といった環境と建築との関係において、<隔たりの認識>がみられるものであり、建築家が環境の読み込みと創作した建築の関係に意識的であることが窺えた。《建築と構成要素》は、イメージしていた素材の質感が、現実になじみ合った建築において全く違う素材の表情が表れたというように、材料や構造、また光や風を含み込んだものを構成要素とし、それと建築との関係において、<隔たりの認識>がみられるものである。

次に、【自己】に含まれる3つのカテゴリーをみていくと、まず《抽象の実体化》は、建築家自身の概念的な意図や言葉、平面としての建築イメージなどの実体化において、<隔たりの認識>がみられるものである。ここでは、「反重力の側面を引き出す」というような非現実的イメージの実体化を試みるという例が多数みられるのが特徴である。《方法論》では、建築の創作における建築家の論理的思考、方法論において、<隔たりの認識>がみられ、例えば論理的に建築を創作していった結果、論理的ではなく直感的に創作すべきだったというものがみられた。《思考の情況》では、建築の創作における建築家の思考の過程や、そこでの意識において、<隔たりの認識>がみられるものであり、例えば、意識的な操作より、現実には無意識的な部分が大きく創作に影響してしまう、というものがみられる。また図1において、《思考の情況》と《方法論》が大きく重複していることから、建築家の思考と

表3 具体例

	<p>NO.65 電柱岩/星野厚雄</p> <p>スゴ味のある素材は、設計者・職人、そして施主、それぞれの立場にエキサイティングな衝動をかりたてる。それが時として、固面そっちの勢いとなって暴走するわけだが</p> <p>【関係】 《建築と構成要素》</p>
	<p>NO.84 LPハウス2/小宮山昭</p> <p>いくらか高次のマトリックスを組み立てたところで建築はできない。私はただ少しだけでもなら説明のつかない任意の造形作業を遂げた。</p> <p>【自己】 《思考の情況》 「主観と客観」 《方法論》</p>
	<p>NO.158-2 駅と街/渡辺誠</p> <p>気配の配線の処理ひとつ、自らの意思では調整できない。設計者が全体を調整しようとしても、その権限は無い...高度なエンジニアリングを集めても、いい建築ができるとは限らない。さらに、多くの場合、監理ができない...ボランティアのうえに施工図を見るのも手続きがあるとなると困難を極める。</p> <p>【形式・規範】 《施工時における境遇》</p>

表4 <隔たりの認識>の[意味内容]の構成比

【関係】			【自己】			【形式・規範】	計
《建築と人間》	《建築と環境》	《建築と構成要素》	《方法論》	《思考の情況》	《抽象の実体化》		
(16)	(19)	(22)	(60)	(31)	(49)	(34)	(231)
7.4%	8.6%	10.0%	26.9%	13.3%	21.1%	15.5%	100.0%
(53)			(118)			(34)	(205)
20.6%			57.4%			17.4%	100.0%

表4註) ()内の数字はプロット数を示し、複数のカテゴリーに重複する<隔たりの認識>がみられたため、合計数は一致しない。

論理との深いつながりが窺える。

また【形式・規範】は、「建築の持つ形式に縛られる」というものや、機能主義的な方法と現実とのギャップ、施工時の建築家の立場において<隔たりの認識>がみられた。

各側面、カテゴリーが全体の中で占める割合についてみると(表4)、【自己】が占める割合の高さから、全体的に<隔たりの認識>は、建築家の意識や概念の問題として生じることが多いといえ、建築の創作における建築家の自意識の強さが窺える。また、《建築と人間》の占める割合が全体的にみて最も低いことも特徴的といえる。

3. 結 本編では、建築家が創作においてイメージと現実空間の間にとどのような<隔たりの認識>を持っているのかを明らかにするため、<隔たりの認識>を言説から抽出し、KJ法的に分類整理した。その結果、【関係】【自己】【形式・規範】の3つの側面と、6つのカテゴリーで捉えることができ、その構成比にもいくつかの傾向をみることもできた。

註1) ここでは、現代日本の代表的な建築誌のひとつである『新建築』(1950~2005)に発表された「論文」、「作品解説」のうち<隔たりの認識>が明確に読みとれる164の論説を資料として扱い、その中から186の<隔たりの認識>が抽出された。

2) KJ法: 川喜田二郎『発想法』(中央公論社)

* アトリエバンク
** 室蘭工業大学建設システム工学科講師
*** 室蘭工業大学大学院

* Atelier BNK
** Lecturer, Dept. of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology
*** Graduate school, Muroran Institute of Technology